

研修報告書 No.28

所 属：昭和医科大学病院

研修先：大月病院

氏 名：小森 秀一

私は今回、高知県西部の地域医療、特に幡多郡大月町の医療現場を体験し、普段勤務している大学病院とは大きく異なる医療の在り方を肌で感じることができました。まず強く印象に残ったのは、患者さんを取り巻く家族関係や地域コミュニティの結びつきの強さです。親戚や知人といった濃厚な人間関係が、受診のきっかけや治療方針の決定に大きな影響を与えている場面に多々遭遇しました。「近所の人に勧められたから」「親戚がここにかかっているから」という理由は、都市部では希薄になりつつあるものですが、高知の地域医療においては、それが信頼の起点として非常に重要な役割を担っていると感じました。

都市部やその周辺では、高度な医療機器や専門医が揃っている一方で、今回研修した大月病院周辺の地域では、物理的な距離や交通インフラの課題、医療機器の有無が、受診から診断、治療に至るまでの律速因子として存在するように感じました。重症例や特殊な検査が必要な場合、診断に要する時間的コストや治療予後に対する影響があり、このような意味でもファーストタッチはプレッシャーがあります。こうした環境下で、スキルを維持・向上させるための工夫として、週に一度程度の頻度で外部病院での勤務を行い、新たな知見を習得されている姿が印象的でした。

今回の研修では、大学病院での急性期治療に携わる研修スタイルとは異なり、実際の業務においては、責任の所在が重い手技等に直接携わる機会は限られていたものの、外来でどのような判断のもとに処方が行われ、どのような経過観察がなされているかを学ぶことができました。現在の研修では、病棟管理が中心になるため、一人の患者さんを長期的に、かつ生活背景まで含めて診察する外来業務には多くの気づきがありました。

また、病院内での診療に留まらず、デイサービスやグループホームへの往診・診察に同行したことは非常に貴重な経験でした。施設への入所に際しては、患者さん本人の意向のみならず、ご家族の意見も含めて十分に汲み取った上で、納得感のある合意形成をする努力がなされていることも印象的でした。さらに、一度入所して終わりではなく、入所後も「今後どのように過ごしていくべきか」を多職種で話し合うカンファレンスが定期的にもたれており、継続的なケアの質を担保する体制がありました。患者さんが住み慣れた地域で、最期まで自分らしく過ごす「看取り」までを希望された場合、それを地域全体で支え、実現できる環境があることに驚きました。退院後の生活や人生の最終段階を見据えた医療の在り方について、より具体的なイメージを持つことができました。

本研修全体を通じて、「知識の引き出しを増やす努力」と「診断の網を広げる意識」の重

要性を再認識しました。地域医療の現場では、専門外であってもまず自分が最初の窓口となります。疾患概念として頭の片隅に置いていなければ、そもそも疑うことすらできず、診断の機会を逃してしまいます。常にアンテナを広げ、知識を蓄積し続けることの大切さを実感しました。また、内視鏡検査などの一定の専門スキルを保持していることが、地域においては患者さんへの治療介入を早める強力な武器になることも学びました。専門性を持ちつつ、それをジェネラルな視点の中でどう活かすかという視点は、今後のキャリア形成における大きな指針となりました。

最後に、本研修を通じて「患者さんがどこまでの医療を求めているのか」という、医療ニーズの個別性について深く考える機会を得ました。単に疾患を治すことだけが正解ではなく、患者さんの価値観や生活状況に寄り添い、納得感のある着地点を見出すことが、地域医療の現場で求められる重要な役割であると感じました。今回の研修で得た知見を、今後の診療に活かしていきます。一ヶ月間、熱心にご指導いただいた先生方、ならびにスタッフの皆様へ深く感謝申し上げます。